

# 高大接続改革に作問力向上へ

## ●茨城教育研修センターが高校向け講座



茨城県教育研修センター(安藤昌俊所長)は6月26日、笠間市の同センター内で「思考力・判断力・表現力を高める指導力向上研修講座」の1日目を開講した。今年度の新規事業「大学入学者選抜改革等対策事業」の中心を成すもので、平均年齢40歳の中堅教員229人が参加。10月までの3日間にわたり、大学などの専門家が教職大学院とも連携した講義や演習、研究協議を通して、オリジナル問題を作成する力を向上させることを目指す。同センターによると、高大接続改革の動向に対応した研修を実施するのは、全国に先駆けたり組みだという。

### 生徒に一生の力を付ける

午前の最初は、安藤所長が講座の目的について講話を行った。現役時代に担当していた世界史を例に、単に知識を暗記させるのではなく、生徒に自分の言葉や文章で時代を認識させることが重要だと強調した。

安藤所長は当時、単元やテーマごとに60〜150字の論述活動を行わせ、定期考査でも記述式問題を出題。3年次の6月後半から11月まで開

講する週2時間程度の課外講座では90〜600字程度を書かせ、大学入試センター試験の終了後には集団・個別指導も実施していた。卒業生からは▽大学のレポートを書くことが苦にならなかった▽司法試験や公認会計士試験などの論文方式に役立つ▽入社試験でもしつかりとした自己アピールが書けるようになった▽40・50代になっても、高校時代に身につけた話す力や書く力が自分のベイスになっている——といった感想が聞かれるという。

安藤所長は、地理歴史科はもとより、理科や数学では現代文の論理的な解釈が基礎となるし、英語でも現代文の素養に地歴の知識が必要だと指摘。知識・技能のアウトプットを行わせることが重要で、思考力・表現力を身につけさせれば、判断力は付いてくるのだと解説した。

学力の3要素や資質・能力の三つの柱にしても、生徒が社会でどう活躍するかを思い描きながら教えるのとよいとアドバイス。オリジナル問題を作成することで本質的な授業のスキルを向上させ、生徒に入試テクニックにとどまらない、一生涯にわたって使える能力を身につけさせるよう訴えた。

最後に、講座で得た成果を個人だけにとどめず、各校で教科担当者に広げること、授業を改善するとともに、新テスト対策にもつなげるよう呼び掛けた。

この後、文系(国語、地歴、外国語)と理系(数学、理科)に分かれて実践発表を行った。

竹園高校の大竹伸輝教諭(国語)は、「探Q」(Qは感覚質を意味するラテン語qualiaに由来)の取り組みなどを紹介した。筑波研究学園都市で初の公立高校として開校した同高は現在、1学年に普通科6クラスと国際科2クラスがあり、それぞれ2年次から文・理やコースに分かれる。国立大学の現役合格を重視しており、筑波大学の合格者数は全国1位だが、今年度入試では東京大学の受験者がいなくなるなど「超難関大学離れ」が悩みで、3年間を見通した指導が課題だという。

そこで1年次では全員、「探Q基礎」としてデイベートや小論文を課している。2年次は国際科のみ、筑波大学の大学院生をティーチングアシスタント(TA)に迎え、ゼミ形式の課題研究を行っている。論理的思考力や情報発信力、表現力、知的探究心を育成することが狙いだ。

国語科では「授業第一主義」を掲げる一方、入学前から新書を読んで意見文を書く課題を課す。1年次から小論文演習(基礎編)などを実施したり、土曜講座で評論文を1000字で要約させたりする。3年次では小論文演習(入試レベル)ほか、課外授業で難関大学以上の過去問を解かせたり、個別添削を行ったりしている。

## 授業改善の課題、常に見直しを

午後は、文部科学省改革推進本部「高大接続改革チーム」のメンバーでもある荒瀬克己大谷大学教授（元京都市立堀川高校長）が講義を行った。

初任の市立伏見工業高校で、指導困難な生徒が多い中でも授業を成立させている先輩教員の授業を参観しながら同僚と腕を磨いていったエピソードを紹介。学校は、教科の授業や総合的な学習の時間、学校生活といった教育活動だけでなく、「人」と「評価」によって成り立っていると強調した。

学校教育法で学力の3要素を規定しているのも、その表れだと指摘。特に「生涯にわたり学習する基盤が培われるよう」という前置きが「重い」という。その上で、問いを立てる力、答えを生む力を身につけ



教授荒瀬が講義を行う中、エピソード時代の教員

させることが重要だとした。

授業改善のためには、自分の子どもが行きたい、自分の子どもが行かせたい、自分が働きたいと思うような学校

にすることが大事だとアドバイス。目標から現状を引いたものが課題であり、現状は日々変容するものであるから、目標は見直され、課題も当然、変更されるものだとした。

具体的には、まず校内で「教育課程」「学力」「キャリア教育」「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニングⅡ A L）」「評価」などの定義を共有し、その上で目標を設定・共有し、現状に基づき仮説を立て、段取りを組み、振り返りつつ取り組むことが必要だとした。

批判的思考力やメタ認知能力、構造化、コミュニケーション能力は、生徒だけでなく教える側にも求められることだ。自分を対象化するメタ認知能力を持つことは個人として困難でも、学校組織なら取り組みやすいとした。

高大接続改革をめぐっては、「6月目途」に策定・公表するとしていた大学入学共通テストの実施方針などが「今週中（30日まで）は出ないが、7月の半ばごろには必ず出る」と明らかにしながらも、共通テストで測定する学力はごく一部であり、個別試験も含めて評価には限界があることに注意を促しながら、高校教育、大学教育、大学入学者選抜を一体で改革する高大接続改革でも「次につながる評価」が重要だと位置付けた。

講義の後、参加者は科目別の9分散会に分かれて研究協議を行った。今後、大学教授らの指導を受けながら、実際に難関大学で出題された入試問題や科学五輪などの問題について自分なりに採点基準を考えるなどの演習を進め、最終的にはオリ

ジナル問題を作成。こうした研修を通して、生徒の論理的な思考力・判断力・表現力を高めるための指導力を向上させることを狙っている。

事業は3年間続け、最終年度には作成した問題を1冊にまとめて各校に配布し、20年度の大学入試対策に生かしてもらおう考えた。

茨城県では今後、高校でも教員の大量退職・大量採用が続くことが見込まれており、指導力の向上が課題になっているという。今回、各校のミドルリーダーとなるべき中堅教員を集めたのも、そのためだ。

安藤所長は、事業を通して、東大をはじめとして減少傾向にある県立高校生の難関大学合格者を増やしたいとの意図を明かしながらも、狙いは普段の授業の改革であることを説明する。

共通第一次学力試験（共通一次）やセンター試験といった入試改革によって、実際には受験生の偏差値輪切りが進んだだけでなく、個別試験を課さずに入学させる大学が増えたのも事実だ。そんな中、高大接続改革を通して、しつかりとした入試問題を作るよう各大学に求める動きは、高校にとつても好機だと安藤所長は受け止める。「昭和の時代も一方的な授業でよかったわけではないが、主体的・対話的で深い学びが求められる今はなおさら、生徒にきちんと自分の言葉でまとめ、発言させることが、日ごろの授業で求められる。それがそのまま入試につながるだけでなく、将来、社会に出た時にも生き残る力になる」と話している。

（渡辺教司Ⅱ教育ジャーナリスト）